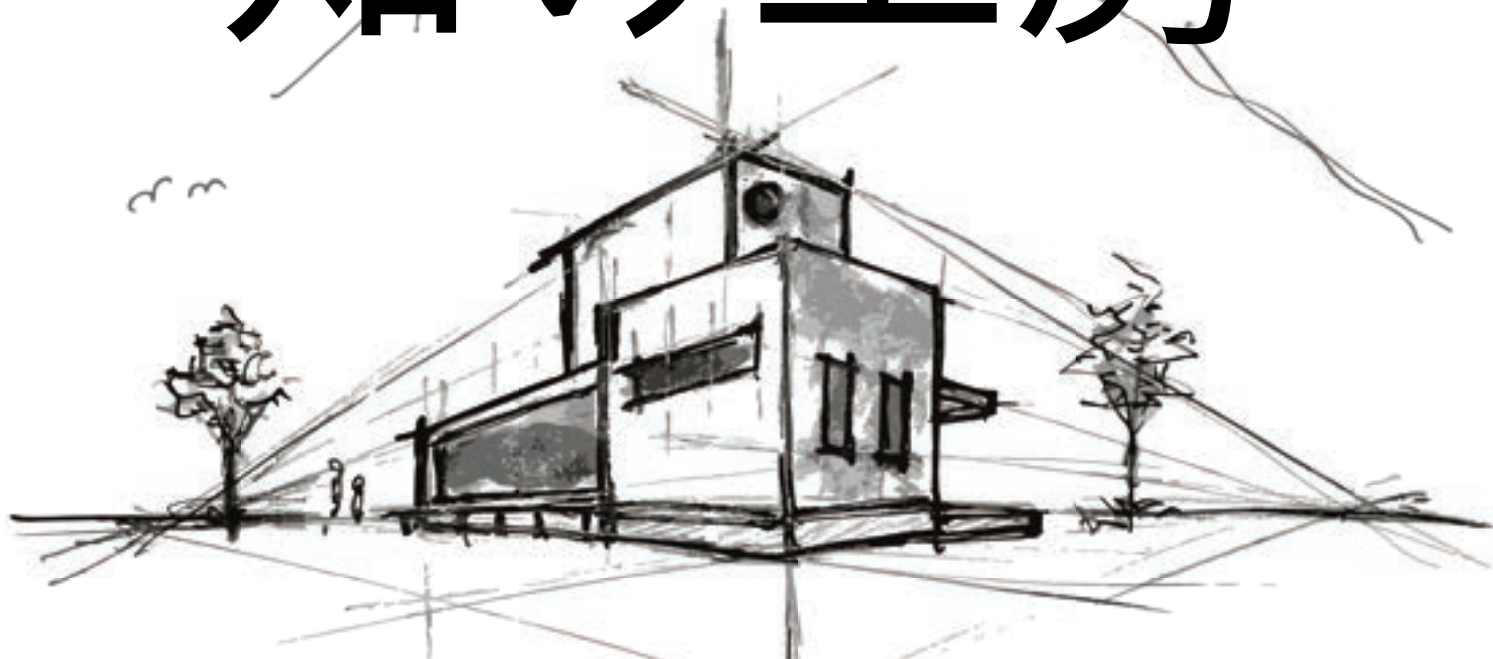


プレ・リカレント教育

知の工房



INTELLIGENCE

國學院大學大学院

プレ・リカレント教育「知の工房」受講にあたって

- * 國學院大學大学院プレ・リカレント教育「知の工房」は、受講料無料です。
- * 本講座は大学の学部を卒業し、社会人となっている方の受講を想定しております。
- * お申し込みは、下記 URL より行ってください。
- * 「知の工房」には第 1 室～第 5 室の 5 つのテーマを用意いたしました（複数受講可）。
1 室（テーマ）には 6 講座が開講されます。
- * 受講方法は Zoom によるオンライン配信（ライブまたはオンデマンド）となります。
1 講座は 90 分間です。受講日の 3 日前までに ZoomID をお知らせします。
- * ライブ配信は都合によりオンデマンド配信となる可能性があります。
- * 受講は無料ですが、アンケートにご回答いただきます。大学院のリカレント教育をより良質なものとするためにご協力をお願い申し上げます。

* 講座開講日時について

別添の國學院大學大学院「71st プレ・リカレント教育 知の工房」〈講義形態・開催日時一覧〉をご確認ください。

* 申込 URL

下記の URL または QR コードからお申し込みください。

<https://k-form.kokugakuin.ac.jp/m?f=683>



プレ・リカレント教育 知の工房

学びが大切だということは、どのような時代、環境にあっても言われ続けてきました。とりわけ多様化が進んでいる現代にとって学びを欠くことはできないと言ってよいでしょう。文化や人種の違いに限らず、価値観や人生観の違いを相互に尊重し、認め合うこと、これを言うことは簡単ですが、実際に実行するととなるとあらゆる矛盾にぶつかってしまいます。多様性を認めるとはいったいどういうことなのでしょう。

その答えを安易に導くことはできないでしょう。しかし、考えることはできます。むしろ、今身につけている知識で感覚的に判断することではありません。そもそも知識がなければ考えることはできません。考えるためには、学びが必要になります。知識を新しく追加したり、これまで身につけていた知識を見つめ直したりすることで、感覚的な判断を刷新し、新しい価値観を身につけるのが学びであり、それに基づいて新たに考えていく。しかし、それが独りよがりとなる場合もあるでしょう。だからこそ、学びの場に集い、集った者同士で意見を述べて話し合ったり検討したりすることで、自らの考えが相対化され、さらに新しく考えていくことができます。

そうは言ったところで、結局正しい答えが出ないではないと言われるかもしれません。確かに問題解決という点ではそうかもしれません。しかし、多様性を重視する現代、正しい答えを求める以外の方法はないのでしょうか。すぐには正しく答えを出せないかもしれないけれども、問題を考え、性急に正しさを見出そうとせず、考え続けることに耐えることも現代には必要なのではないのでしょうか。

國學院大學は140年に及ぼうとする学問伝統を誇ります。なかでも文学、法学、経済学の研究科のある大学院は71年という歴史を有して、学術的な知の革新的な先端に位置しています。それは71年という年月をかけて、ずっと学術的に問題を考え続けてきた学びの場と言ってもよいでしょう。学問伝統と先端とが相容れる場は、まさに伝統と革新に満ちています。伝統はただ古きを守り続けるだけでは衰退してしまいます。この学びの場にいる者ひとりひとりが自分の問題として常に考えていくという先端で、伝統は続いていきます。考えることに耐え続けることは、知の伝統と革新にとっては必須の条件とさえ言うてよいのかもしれませんが。

学びは大切です。だから國學院大學大学院は、その伝統と革新の特質を活かした学びの場を企画しました。たんに知識の教授や伝達ではなく、考え続けることのできる場の創出です。知はそこに集うみなのかかることによって輝きを持つことでしょう。その意味で創出するのは「知の工房」なのです。工房は、師や先達の伝統的な方法や考え方を知り、自分なりに試みながら、さらに新しさを創造する場であり、守られる伝統とそれを革新する場です。新しさは伝統によって制約され、伝統は新しさによって継続されていく。そこに正しい解はなく、ただ継続した解があるだけです。それは、これまでの時代、文化を継続しながらも反省し、新たに多様性を大切にしようという現代の在り方とよく似ています。「知の工房」もその多様性のうちにありますから、みなが集い、考え続けることのできる場を実現していきたい。その試みのために、國學院大學大学院のプレ・リカレント教育として5つの「知の工房」を準備しました。国語科教育、社会科教育、日本語教育、日本文化の古層の探求、情報と解釈、これら5つの「知の工房」でどのような「解」が見出されるのでしょうか。集うひとりひとりの考えることに、期待が高まります。

知の工房 第1室

国語科教育・古典を学び直し、実践をアップグレードする

知の工房 第1室では、学び続けることを求める現職の先生方、および中学校高等学校の国語科授業について学修したい方を対象にします。古典教材の背景・文化史までを視野に入れ、最新の学説に基づく定番教材の一步踏みこんだ学習内容、古典の言葉と現代語との対照、漢文古典の価値などを追究していきます。各科目を受講することが、教科内容の魅力を伝えるための教材研究のサポートになるはずです。また、学習指導要領改訂の背景や「主体的・対話的で深い学び」について教育方法学の観点から理解を深めたり、具体的な国語科授業の場をイメージしながら、検討・考察する場を設けたりしたいと考えています。国語科授業の豊かさをともに考えたいと願っています。

担当者



齋藤智哉教授
(教育方法学)



石本道明教授
(漢文学)



竹内正彦教授
(日本文学・中古文学)



佐藤長門教授
(歴史学)



吉田永弘教授
(日本語学)



コーディネーター
高山実佐教授
(国語教育学)

第1室 知のラインアップ

INTELLIGENCE LINE-UP

学習指導要領改訂の要点と教師の成長 齋藤智哉

学習指導要領が改訂され、中学校は2021年度から、高等学校は2022年度から実施されている。本講義では、指導要領改訂の背景を確認しつつ、「主体的・対話的で深い学び」の理解を深める。また、生徒たちの学び方が変わるならば、教師にも変化が求められることは言うまでもない。そのため、教師が学び続け成長するために必要なことの概略を、お伝えすることにした。

『源氏物語』「若紫」巻を読む—現在の研究状況をふまえて— 竹内正彦

国語科教育における授業の質の向上をはかるためには、最新の研究成果を取り入れた教材研究が必要となってこよう。本科目（講座）では、そうした観点にたつて、古文の定番教材といってよい『源氏物語』「若紫」巻の若紫登場の場面をとりあげ、具体的に古語の解釈や文法事項等についての考え方を確認しながら読み解いたうえで、近年発見された写本のことなどにもふれつつ、現在の研究状況をふまえた新たな読みの可能性を提示してみたい。

日本語学の観点から：言語教育としての古文 吉田永弘

古典教育の役割の一つに古典の言葉を学ぶことで現代語を相対化するという言語教育としての側面があります。本科目（講義）では、日本語学の立場から、古代語と現代語の対照という観点で古典の敬語を取り上げて論じます。特に、学校教育では扱われることが少ないものと思われる名詞の敬語について、現代語の「お＋名詞」と古典語の「御＋名詞」の用法を対照し、共通点と相違点を明らかにすることを目的とします。

日本人は漢文に何を見出してきたか 石本道明

現代では漢文を「中国の古典」として捉え、我々の古典とする視点が弱まってきているように見える。そこで、我々が「漢文古典」の中に何を見出してきたのかを、今一度省みてみたい。その基盤は、本来訳語である「訓読み」が漢字ごとに定着し、読む順番を入れ替えれば、日本文として「読み下せる」変換するシステムにあり、その上で我々の価値に合う対象を主体的に選択してきた歴史がある。その一端を紹介したいと思う。

摂政・関白制の成立と展開 佐藤長門

平安中期（11世紀）以降の古代日本では、それまでの唐風文化から脱皮して、日本的な「国風文化」が展開していきます。その成立の背景には、i) 遣唐使の停止で中国との外交関係がなくなったこと、ii) かな文学が発達したこと、iii) 藤原氏中心の摂関政治が展開したことなどがあげられていますが、今回はそのうちのiii)を取りあげ、「国風文化」の成立前史として、摂政・関白制の成立とその後の展開について検討していきます。

文学教育における創作—短歌の学習指導— 高山実佐

国語科の「書くこと」に関する指導において、短歌や俳句で表現することや、小説や詩歌などを創作することが言語活動例として示されています。小説家でも歌人・俳人でもない教師が、文学の創作を教えることなどできないという思いはもっともなことです。担当者も創作者ではありません。が、ことばの魅力に改めて気づく学習指導を、生徒たちと一緒にどのような学びをつくることができるかを、先生方と考えたいと思います。

知の工房 第2室

「総合」と「探究」のための社会科学学習

新学習指導要領が示す今後の社会科学学習においては、学習者自身が諸資料から情報を読み取り、自身で課題を追究することが求められています。高等学校の新設科目にも「総合」や「探究」の名称がつけられているとおり、広い視野から総合的に社会を捉え、諸資料を活用しながら探究するというのが新しい学びの姿とされています。

教師は、適切に資料を選択し提示することで学習活動を支える役割を担うが、そのためには、教師自身が多様な資料への広い関心と深い理解を持つことが不可欠です。

そこで本プログラムでは、主に中学校社会科・高等学校地理歴史科教員や、地理学・歴史学に関心のある方を対象に、研究成果の一端を紹介しつつ、総合的・探究的な社会科学学習のあり方について、学び考える機会を第2室で提供したいと思います。

担当者



コーディネーター
多和田真理子准教授
(教育学・日本教育史)



吉田敏弘教授
(歴史地理学・絵図古地図研究)



樋口秀実教授
(歴史学・日中関係史)



矢部健太郎教授
(歴史学・日本中世史)



坂本一登教授
(政治学・日本政治史)



杉山里枝教授
(日本経済史・経営史)

第2室 知のラインアップ

INTELLIGENCE LINE-UP

社会科学習における「総合」と「探究」の試み 多和田真理子

新学習指導要領のもと、学びのあり方が変わろうとしています。中学校教科書の変更点や高等学校の科目新設など、まずは新学習指導要領における「総合」と「探究」について講述します。また、もともと社会科は総合的な学びを想定して設置された教科であり、過去の社会科教育実践には、総合的かつ探究的な学習につながる多くの取り組みが蓄積されています。過去の授業実践を手がかりに、資料を活用した今後の学習デザインを考えます。

GIS（地理情報システム）と防災情報 吉田敏弘

令和4年度より高校地歴科で必修となった「地理総合」。そこで重視されているのがGIS（地理情報システム）を用いた防災教育です。本講では、GISの基本的な考え方を解説したのち、国土地理院の「地理院地図」に収録されている様々な防災情報を概観し、その活用をめざします。過去のさまざまな災害をも事例に取り込みながら、多くの主題図を重ね合わせることから見えてくる災害のリスクについて、わかりやすく講述したいと思います。

近代日本の「国際化」 樋口秀実

近年新設された「歴史総合」という科目は、「近代化」と「国際化（グローバル化）」というテーマを鍵概念として日本史と世界史とを同時並行的に学ぼうとするものです。この授業では、近年に発表された幾つかの注目すべき研究業績を紹介しながら、「近代日本の国際化」をめぐる最新の研究動向がどうなっているのかを紹介していきたいと考えています。

前近代史の探究と史料—中近世移行期を中心に— 矢部健太郎

歴史を探究するためには、考える素材としての史料が不可欠です。史料には、料理における材料と同じく、情報としての鮮度の差、信頼度の差が存在します。そのため、正確な歴史探究には「史料批判」という作業が必要であり、さらに史料の選択、並べ方などによって、導かれる結論も大きく変化しうるのである。本講では、中近世移行期という激動の時代である織豊期を射程として、具体例をあげつつ、歴史を探究する方法について考えたいと思います。

19世紀グローバリズムと近代日本 坂本一登

18世紀後半から19世紀前半にかけて、欧米で様々な革命が勃発し、相互に影響を与えた。とりわけフランス革命は、基本的人権や立憲主義といった政治イデオロギーの震源地となり、続くナポレオン戦争は、欧州全体に近代国民国家を誕生させる契機となった。そうした新しいグローバルな文脈のなかで、日本はそれに対応したのか、そしてその対応はどのような特徴をもつのかという視点から、明治国家の形成を考えてみたいと思います。

躍進と停滞の1920年代 杉山里枝

戦間期、1920年代の日本経済は、「光と影」の入り混じる時期でした。一方では相次ぐ恐慌、震災、金融不安といった「停滞」の側面がみられましたが、その一方では都市化の進展、新産業の発展といった、「躍進」の側面がみられました。この科目では、担当者の専門である日本経済史・経営史の観点から、1920年代日本経済の光と影の各側面について、具体的な事例を用いながらお話をしていきたいと思います。

日本語教育の世界

現代の日本において国際交流や留学生の受け入れや日本の少子化に対応した外国人材の受け入れ、また海外における日本語学習者の増加など、日本の国内および海外で日本語教育に関わる機会が増えてきました。この講座では、日本語教育に関心のある方に現在行われている日本語教育に触れていただき、時代の変化とともに生ずる新たなさまざまな問題に対応して日々進化する日本語教育および学習者の習得する日本語の特色について行われているさまざまな視点からの研究を紹介します。日本語教育の仕事と関係のある方もない方も大学院の日本語教育の研究分野に触れることで、新たな世界が広がることでしょう。さまざまなきっかけで日本語教育に関心を抱いた方、日本語教育に関する研究テーマを模索している方にこの第3室をお勧めします。

担当者



菊地康人教授
(日本語学・日本語教育学)



伊藤孝行兼任講師
(日本語学・日本語教育)



橋本ゆかり兼任講師
(日本語教育学)



河崎みゆき兼任講師
(日中対照言語研究・社会言語学)



宇佐美まゆみ兼任講師
(言語社会心理学・談話研究)



コーディネーター
諸星美智直教授
(ビジネス言語学)

第3室 知のラインアップ

INTELLIGENCE LINE-UP

日本語を教えるということ 菊地康人

「外国人（正確には日本語が母語でない人）に日本語を教える」といっても、いろいろな場合があるのですが、その一般的な場合について、ある程度イメージしていただけるような紹介をします。具体的には、代表的な日本語教科書の一部を見ながら（教科書購入は不要）、ここは何を勉強し、どんな授業をするのかといったことを考えます。予備知識は不要ですが、日本語教育を多少ご存じの方にも、それなりに新たな知識を得ていただけるのではと思います。

第二言語習得論 橋本ゆかり

第二言語習得に関する基礎的内容を講義します。次に示す2つのことを主な目的とします。1) 第二言語習得研究の変遷（対照分析研究、誤用分析研究、中間言語研究）とその背後にある合理的な流れを学ぶ。2) 代表的な第二言語習得理論を学び、言語を第二言語として習得するとはどのようなことなのか、そして目標言語の習得を促進するためにどのような教育が効果的なのかを考える。

ことばとジェンダーの問題と日本語教育 宇佐美まゆみ

SDGs 推進の機運もあってか、近年、ジェンダーの問題に対する意識が以前にも増して高まっている。しかし、日本語という「ことば」自体に潜む「問題」や日本語自体にまつわる問題については、意識さえしていない人が多い。本講義では、総合的なジェンダーの問題を踏まえた上で、その中における「ことば」に関する問題に焦点を当て、その重要性を論じる。また、それが日本語教育の現場でどのような形で顕在化するかとその対応についても考える。

日本語教師のための超入門 ICT リテラシー 伊藤孝行

日本語教育関係者にとっても好むと好まざるとに関わらず ICT リテラシーが求められる時代になっています。新型コロナウイルスの影響により、「オンライン○○」は分野を問わずすっかりなじみのあることばになりました。この回では、日本語教育関係者が知っておいた方がよいニュースを概観し、それをふまえて日本語教師にとってこれだけは身につけておきたい超入門 ICT リテラシーを知り、実践します。

日中対照言語研究と社会言語学 河崎みゆき

対照言語研究とは、2つ以上の言語間の類似点や相違点を明らかにしていく研究分野です。本講義では対照言語研究（主に日中対照）がどのように日本語教育や研究に結びついているかをお話する予定です。また、従来の語彙、音声、文法の対照にとどまらず、社会言語学の視点を取り入れることによって、社会の中のことばの現象に気づき、研究の出発点となる観察力が養えると考えています。中国語の知識は特になくても大丈夫です。

ビジネス文書とビジネス会話の間 諸星美智直

学習者の日本語能力が向上して、日本語を仕事に活かそうとするとき必要となるのがビジネス日本語の知識です。ビジネスの現場における会話の内容を文書にすると口語でありながら候文体の商用文書以来の語彙語法も交えた文体で表現することになります。文書と会話の語彙語法の特徴について、ビジネス文書の文例集と経済小説を資料として取り上げて検討を加えます。

知の工房 第4室

日本の〈古層〉を探る

日本の古典研究を通じて日本人の思想や文化を明らかにするのは本学の学問の基本とするところですが、その基底には江戸時代に興った「國學」の存在があります。江戸時代であれ現代であれ、日本の思想・文化の根本を探るためにはそのはじまりである古代日本について考えなければなりません。前近代（古代～近世）や近現代にあっても、それぞれの思想・文化の基盤となる「古層」を見出すことが出来るはずでず。本講座では、本学学問の基層である国文・国史・国法の各分野から、『古事記』『万葉集』の古層、古代儀礼と王権、古代祭祀の実像、近世の古典復興、江戸幕府の法体系と古代律令制をテーマとして、各講義を第4室で行います。

担当者



コーディネーター
谷口雅博教授
(日本上代文学)



土佐秀里教授
(日本上代文学)



佐藤長門教授
(歴史学)



笹生衛教授
(日本宗教史・考古学)



武田秀章教授
(神道学)



高塩博名誉教授
(日本法制史学)

第4室 知のラインアップ

INTELLIGENCE LINE-UP

天地のはじまりの神話を読む 谷口雅博

天皇家の起源を記す『古事記』『日本書紀』の神話は、編纂に関わった人々が様々に工夫を凝らして作成したものであると思われまふ。当時の知の最先端が盛り込まれていると言っても良いかも知れまふ。しかしそこに集積された個々の神話や、個々の言葉には、文字をもたない時代の記憶や伝承が存在しています。外来の漢字を用いて表現されたそれら神話の、古い要素と新しい要素を、『古事記』『日本書紀』の神話冒頭部を対象として検討してゆきます。

万葉集の〈古代性〉と〈近代性〉 土佐秀里

七～八世紀に成立した万葉集の歌には、新しく出現した都市生活の様相が詠み込まれるなど、その時代を直接反映した「新しさ」があります。しかし同時に、原始的な信仰や呪術的な思考といった「古層」もそこに色濃く存しています。後者は時代を超えて存在する基層であるため、民俗学的研究法が有効な部分です。本講では、万葉歌に新旧の二面があることを捉え、それぞれに対して有効な研究方法が何であるのか、具体例を挙げながら検証してゆきます。

奉誄儀礼と王権継承 佐藤長門

古代の日本において、人が亡くなった際に、埋葬するまでの一定期間、遺体を小屋に安置したり仮埋葬したりしておき、その間に遺族や近親者などが諸儀礼をおこなったことを殯（もがり）といい、『古事記』や『万葉集』にも出てきます。今回は殯の諸儀礼のうち、天皇など貴人が亡くなった際におこなわれた誄（しのびごと）を奉る儀式を取りあげ、それと王権継承との関係を検討してみたいと思います。

考古学資料から考える古代祭祀の実像 笹生衛

古代祭祀を考えるときに、現在においても大場磐雄が示した神道考古学の研究成果を参考とすることは多いのではないのでしょうか。しかし近年、祭祀遺跡に関する新たな発掘調査成果が多数報告されるなか、4・5世紀以降における古代祭祀遺跡の多様な様相があきらかになってきました。この講座では最新の考古学資料を参照しながら古代祭祀の実態を復元し、あわせて遺跡の立地環境の傾向を検討することで、神の考え方についても検討してゆきます。

近世の「古典復興」をめぐる 武田秀章

近世に入るや、平和な社会の実現を背景に、「文運興隆」の時代が到来しました。その中で、わが国における「古典復興」の動きが展開していきます。この講座では、近世の多様な人々によって、わが国の古典籍や宮廷文化・神社や山陵等が、いかに顧みられ、いかに省察されていったのかということ、いささか瞥見していきたいと思ひます。

「公事方御定書」の法体系と律令法 高塩博

「公事方御定書」上下巻は江戸幕府の基本法です。中学の社会科教科書に登場し、高校の日本史教科書では太字で記されるほどですから、「公事方御定書」については知り尽くされていると思ひました。ところが研究してみると、肝心な点が多数未解明であることが判明しました。その一つが、上下巻に分かれていることの意味です。従来の研究はこのことに何ら言及していません。この疑問を見つけ、考察した結果を、お話ししようと思ひます。

人文科学研究と情報

従来の人文学研究は文献や資料と向き合うという(イメージがある)ものだったが、現在は情報分析を取り入れ新たな解釈を生み出しつつある。想定される受講対象の中・高の教員に対し、学校教育の場における「情報」教育の最新動向をふまえて、それぞれの研究に取り組む國學院大学の教員にその先端分野を紹介してもらい、分析や考察の対象を「情報」としてどのように解釈できるのだろうか。また、各分野における分析や考察を通じてどのような「解釈」がなされるのであろうか。多角的な視点から新たな「知」へのアプローチをいかにとらえるかを、この第5室では考える。



担当者

コーディネーター
細井長教授(国際経済)



井上明芳教授
(日本近現代文学)



伊藤孝行兼任講師
(日本語学・日本語教育)



小池寿子教授
(西洋美術史・死の図像学)



高橋尚子教授
(情報学)



吉岡孝教授
(歴史学)



高橋信行教授
(公法学)

第5室 知のラインアップ

INTELLIGENCE LINE-UP

文学テキストへのデータ・マイニングの試み 井上明芳

文学作品の解釈には、解釈者の意図が反映されています。それは一体どういうことなのでしょう。その考察のためにデータ・マイニング（計量テキスト分析）の方法を用いてみます。具体的に森敦の小説理論が描かれていると読まれてきた『意味の変容』を用いて、言語の出現率によって文学作品にアプローチし、解釈者の意図に拠らない〈読み〉を試みることで、文学作品の解釈について考えてみます。

イメージ研究の現在 小池寿子

1970年代以降、「美術史」研究の方向性は大きく変わった。「美術」「芸術」という言葉すら用いられず、さらに2000年代には「アート」より「イメージ」へとシフトしている。その背景には、情報化、グローバル化などの社会変化があり、根底には脱価値観への志向がある。伝統的な図像解釈は、果たしてどこまで有効なのであろうか。具体的なイメージを用いて、イメージ研究の可能性について考える。

「慶安の御触書」にみる解釈の変更とその背景 吉岡孝

情報化社会では情報は絶えず刷新される。歴史学の史料も情報といえようが、安定して評価されてきた史料は、あたかも価値が不変であるように思われがちである。しかしもちろんそうではない。例えばかつて高校の日本史教科書では「慶安の御触書」が、かなり重要なものとして紹介されていた。だが最近ではほとんど触れられない。これは当該法令が江戸幕府法令ではないという新しい「解釈」が学会の共通見解になったためである。

テキストアナリシスの前に 伊藤孝行

日本語学・日本語教育といった言語の分野に於いても情報学的なアプローチは年々キーワードになりつつあります。新型コロナウイルスの影響により、「オンライン○○」は分野を問わずすっかりなじみのあることばになりました。この回では、いわゆる文系にとって情報学的なアプローチを試みる際に備えておく有効なコミュニケーションにあたっての心構えをご紹介します。テキストアナリシス（テキストマイニング）とはどのようなものなのかをご紹介します。

情報教育の最新動向と人文社会系科目との関わり 高橋尚子

授業のICT化、プログラミング教育の導入、高校「情報I」の必修化、大学入学共通テストへの「情報」設置など、新しい学習指導要領とともに、学校教育を取り巻く環境に「情報」が大量に踊っています。そこで、各自の授業や校務を見直し、何ができて、できていないのかをチェックできるよう、学校教育における情報教育の最新動向と人文社会系科目との関わり整理して紹介します。

ミシェル・トロペールのリアリズム的解釈理論 高橋信行

フランスの憲法学者、ミシェル・トロペールにおいては、「リアリズム」を極限まで推し進めた解釈理論が展開されている。端的にいえば、裁判官は解釈という名のもとに、法律や憲法の内容を自由に改変できるのではないか、という先鋭的かつ独創的な理論である。彼がなぜこのような理論を展開したのか、そして、その妥当性についてどのように考えるべきなのか、といった問題を紹介します。